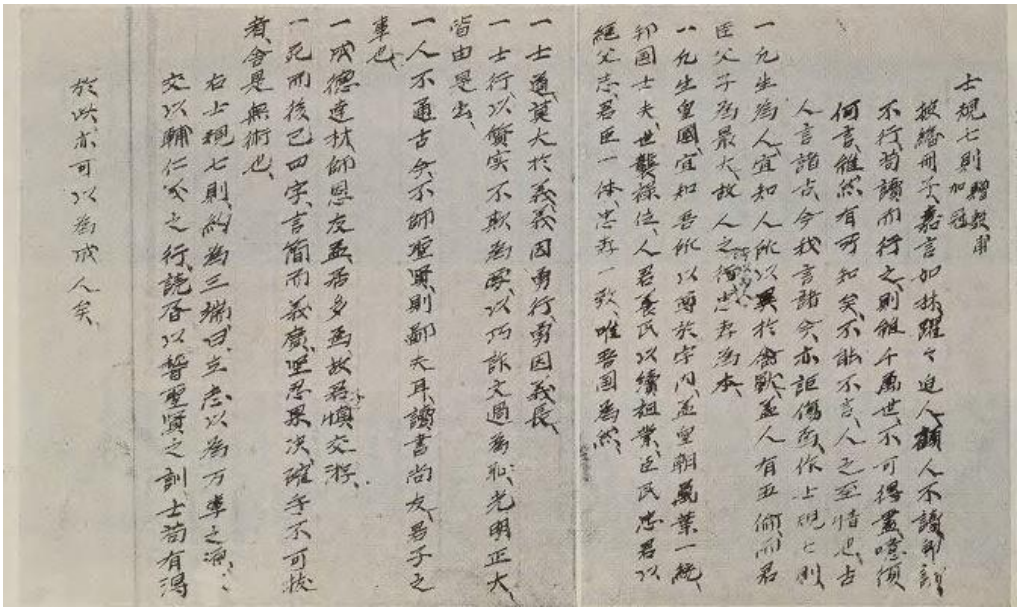
【サムライの覚悟】

佐久間が海軍を志したきっかけは、明治２９年中学三年の時、小浜に寄港した軍艦「橋立＝はしだて」艦長片岡七郎大佐が小浜中に来校、先の日清戦争の実戦談を行った際の感激による。片岡は日露戦争時の第三艦隊司令長官として勇名を馳せた日本海軍の名将の一人である。

以後佐久間は海軍兵学校を目指し、猛烈に励み明治三十一年満十九歳の時入学を果たし、明治三十四年兵学校を卒業し、三十六年海軍少尉に任官した。三十七年には日露戦争に勇躍出陣した。開戦初頭の旅順口閉塞作戦には率先して決死隊に志願したが許可は降りなかった。しかし日本海海戦等において尽力し、無事凱旋している。戦後は、新しく登場した潜水艇の乗組員として、潜水艇の作戦の研究と発展に自己の使命を見い出し全力をあげてこれに取り組みつつあったが、惜しくも非業の死を遂げたのであった。未だ若干三十一才の若さである。海軍軍人、武人としての平生の覚悟が如何に立派であったかは、遭難時における佐久間の措置とその遺書が何よりも雄弁にこれを物語っている。このサムライとしての覚悟は吉田松陰の「士規七則」を深く心に刻んだ結果であろう。部下全員が決して持ち場を離れず、死ぬまで己のやるべき事に尽力を果たし、従容として死を迎えた現場の状況を鑑みれば容易に想像し得るではないか。



士規七則

（士規七則・現代語訳）

- 人間として生まれたからには、鳥や獣との違いを知らなければならない。人には守るべき 5 つの道がある。（父子の親、君臣の義、夫婦の別、長幼の序、朋友の信）。その中でも君臣の義、父子の親が最も大切である。ゆえに人が人であるゆえんは、忠考が原点である。

- 日本に生まれたからには、日本が世界の中で尊い理由を知らなければならない。日本の朝廷は万世一系であり、国民は天皇の下で禄と位を代々踏襲している。天皇は民を養い、先祖の事業を告ぎ、民は主君に忠義をもって、父の志を継ぐ。君臣一体、忠考一致は、ただ我が日本のみのことである。

- 武士の道は、義より大切なものはない。義は勇気をもって行われ、勇気は義を行うことで発揮される。

- 武士の行動は、質実で人を欺かないことが大切で、欺いたり言い繕うことは恥ずかしいことである。公明正大であることがすべての出発点である。

- 昔から今に至る歴史を知らず、立派な聖人や賢者に学ばなければ、心が卑しい人間になる。本を読み賢人を友とすることは立派な人間の行うことである。

- 仁徳を積み、才能を発揮するには、師の恩や友の導きによるところが大きい。ゆえに人との交際は大切である。

- 死ぬまでやり続けるという言葉は簡単であるが意味は深い。意志が固く、忍耐強く、心を変えないでいることは、この姿勢なくてはできないことだ。

＜家族への至情＞

かくの如く武人の鏡とも言うべき佐久間は、同時に家族に対し至愛（深い愛情）の持主でもあった。生前、既に彼は家族に対し遺言状を書いており、己の死後の万全なる配慮を忘れず「我が所有権内にある確実な遺産を予め分配し、以って我が亡き後の老父の養老、舎弟の学費、遺女の養育、修学及び結婚の諸

費にあて、、、、」と書いている。母の「まつ」は亡く、老父は健在だが未だ勉学中の弟がいた。姉と妹は嫁いでいた。さらに佐久間には、生まれて間もない幼女輝子があった。

彼は二十九才の時結婚して翌年輝子が生まれたが、妻「つぎ子」は子を産んですぐ亡くなった。佐久間は妻の死を嘆き悲しみ、次の様に恩師の成田鋼太郎にその真情を包まず吐露している。「あゝ先生、何と申さんか、実に今日の事隻手（せきしゅ）いな、双手を切断せられたる感あり。」、、、、、実に痛嘆の極、胸迫りて言わんと欲する所を知らず。電報を受け取り、「これ夢ならば、とく覚めよかしと、祈り居りしもの多時。あゝ人生の悲嘆、何かこれに過ぐるものあらむ。いかに気を丈夫に構うといえども断腸哀悼の情禁ずる能わず」と。彼は後妻を迎える気がせず、我が手にて輝子を育てんとした。しかし乳飲み子なので乳離れする迄は敦賀（つるが）の子供を亡くしたある夫婦に里子に出し、しばらくの育児を依頼した。その翌年に佐久間が亡くなったのだから誠に憐れをとどめた。しかし輝子はすこやかに生長し、やがて医学博士夫人として三児の母となり、父の名を恥ずかしめない生涯を送った。

＜佐久間と恩師＞

佐久間の人格を陶冶（とうや）するにあずかって「力」あったのは、前述した成田鋼太郎であった。佐久間は成田を敬慕し、兵学校のみならず将校になっても度々手紙を書き、成田もまた指導誘掖（導き助けること）を惜しまなかった。その愛弟子佐久間の死を聞いた時、成田は何を思ったであろうか？

成田は次の如く述べている。「日々の各新聞紙上には、四月十五日第六号潜水艇新湊沖合にて沈没。時を経て浮動せず。沈没艇発見。引揚げ。窒息。遺骨移乗。雄々しき最期等続々と報道すれど、その雄々しき最期といえるは、艇を開き見れば艇長は司令塔内に、他の乗組員は各自の配置に就けるまゝ生けるが如くして死に居（お）りたり。死に至る迄、職務に忠実なりとは軍人の本領を発揮して余りあると言えるに過ぎず。予は甚だ物足らぬ心地せり。」

彼佐久間大尉は温厚にして沈勇、小心にして大胆、純忠にして不惑。而して徒（いたずら）に窒息斃死（へいし）せしか。この際、一（いつ）の異彩を放てることなかりしか。嗚呼（ああ）、人は果たして「棺を蓋いて後ならざれば評下得へからざるか。何ぞその平素に似ざると、嗟嘆（さたん）嘆くこと」これ久しくせり。

十九日飛電、江田島より来る。『サクマシ、センコノビダンヲノコセリアンイコウコマ』、これ海軍兵学校教官海軍大尉　駒林次郎君の発信にして「佐久間氏千古の美談を残せり、安意乞う」と読まれたり。嗚呼これあるかな。これあるかな。かくなくてやはと。これより大いに力を得。そのいわゆる美談とは何か、とく聞かまほしと新聞の至るを鶴首ただならず待てり。しかるに二十日の各新聞紙上に艇長大尉の遺言の大要を掲げ、二十一日その全文を登載せり。これを読みて、予は感極まりて泣けり。今泣くものは、その死を悲しめるにあらざるなり、その最期の立派なりしに泣けるなり。その死状（しにざま）の真に我が古武士的なるに泣けるなり。純然たる我が大和魂を発揮し得たるに泣けるなり。彼が少年時代に教養の一分に与（あずか）り、爾来（じらい）十六年間交誼（こうぎ）を絶たざりし予が胸中に沸騰涌潏（ふっとうゆうけつ＝湧出ずること）したる嬉し涙は無量なりき。

「散りにきと　惜しみし夜半（よわ）の山桜　水にうかびて　今朝（けさ）は匂へり」

さらに各新聞は報ぜり。海相は潜水艇沈没の顛末（てんまつ）を伏奏（ふそう＝天皇に申し上げること）せり。艇長の遺言を奏上せり。特に侍従武官を呉に差遣（さしつかわすこと）せられる、お菓子料・祭粢（さいし＝祭りで神にささげる供え物）料の御下賜。位記追賜（いきついし＝勲位を賜わること）。嗚呼何等の光栄ぞや、予もまた深く余栄を感じてさらに泣けり。

船越大佐曰く、「大尉最期の壮烈なりしは、実に軍人の亀鑑というべし。欧米各国の新聞は、この美談を昨今日々の新聞雑誌上に掲げ嘆称して止まずという。さればこの偉人の名誉は一郡一県の上に止まるにあらず、我が帝国日本の名誉にして世界軍人の好典型を残したものなり」、、、、と。口を極めて賞賛せられたり。これを聞ける予は脳裡に嬉し涙の湧沸するを禁ずることあたわざりき。

「散りてのち外っ国（とっくに）人もたたへけり我がしきしまの山桜花」

この師ありてこの弟子ありである。当時の中学校には、成田の如き人物が居た。佐久間の「士規七則」を教えた武士の精神をもつ成田であったから、佐久間の死を聞いたとき、それが普通の軍人とはいささか異なるものがあるに違いないと信じたのである。信じた通りの、いやそれ以上に見事な佐久間の最後に彼は泣いたのである。

今日、佐久間艇長のことを知る人は少ないが、当時にあっては内外一世を驚倒（きょうとう）せしめた出来事であり、佐久間は日本武人の典型として唯一人として、これを讃えぬ者はなかったのである。私も国民学校の頃、修身の教科書で教えられたものである。当時教員であった（鈴木？）健太郎先生は小学生の私達に向かって涙を流しながら話をされたことが今も忘れられない。

教科書に登場する佐久間勉

今の教育は荒廃の極みにある、生徒を善導感化し、一生「教え」を請うほど尊敬を受ける教師は地を払っている。知識は教えるが魂は説いてくれないからだ。だが明治の時代には成田の如く、敬愛し、信頼し合う教師と教え子が居た。佐久間の如き軍人が存在し、彼を薫陶した成田の如き教師が存在したことが１９世紀より２０世紀にかけて欧米列強による世界植民地支配が頂点に達せんとした時、非西洋における唯一の例外たる日本の偉大な興起をもたらし得た大きな要因となったのも事実であろう。現代は確かに物質的には豊かといえよう。しかし人間が心を深く耕さぬまま経済が豊かになったところで、人は本当に豊かさを実感できるのだろうか？

平成２８年１２月２５日

志雲会塾長　有馬正能